

教養教育英語科目における再履修クラスカリキュラム (～2019年度)

The Liberal Arts English Repeater Class Curriculum (－2019 Academic Year)

立 田 夏 子*

Natsuko TATSUTA

要 旨

本稿では、弘前大学教養教育英語科目における再履修者に関する問題点と再履修者数を削減するための対応策を提示した後、対応策に基づいて策定された2017年度以降の再履修クラスカリキュラムを実施した結果を報告する。2019年度再履修クラスカリキュラムを実施した結果から、今後は、再履修クラスのコマ数を増やし、受講対象者の枠も拡大する必要があることが明らかになった。また、本学における再履修クラスカリキュラムは、教員による対面授業とe-Learning教材を活用した自律学習を混合したブレンディッド・ラーニングを取り入れたカリキュラムが有効である可能性が示された。

キーワード：教養教育英語科目、再履修クラスカリキュラム、e-Learning教材

大学教養教育における英語教育

1991年の大学設置基準大綱化により、それまでの「一般教養課程」「専門教育課程」「外国語科目」「保健体育科目」の区別がなくなり、「外国語科目」に属していた英語科目は「教養教育」に属することとなった。日本学術会議（2010）による『21世紀の教養と教養教育』は、大学の教育編成にて外国語教育を含む「一般教育」を「教養教育」「専門教育」と区別しつつ、「教養の形成とその形成を主目的とする教養教育は、一般教育に限定されるものではなく、専門教育を含めて、四年間の大学教育を通じて、さらには大学院の教育も含めて行われるものであり、一般教育・専門教育の両方を含めて総合的に充実を図っていくことが重要である」と提言している。英語教育に関しては、「グローバル化が急速に進展している現代世界では、国際共通語としての地位を確立しつつ英語の教育の充実を図ることも重要」であると述べられているように、大学の英語教育は更なる充実が求められている。その充実方法として、中央教育審議会（2012）は、「学生が主体的に問題を発見し、解を見いだしていく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換」を提言している。

本学における「教養教育英語科目」は、これらの提言に沿ってカリキュラムが組まれている。つまり、必修科目である1年次科目の「Listening」「Reading」「Speaking」「Writing」のみならず、大学4年間を通して英語を学習できるように、高年次科目の「Integrated A」「Integrated B Level 1」「Integrated B Level 2」

* 弘前大学教育推進機構教養教育実践センター

Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for Promotion of Higher Education, Hirosaki University

「Integrated C」が選択科目として設置され、その一部は学部の必修科目として位置付けられている。これらの教養教育英語科目は、英語習熟度によって3レベル（上級・中級・初級）の英語習熟度別クラス編成が行われており、また、全科目における共通の授業概要の一つとして、「様々な文化的背景を持つ人々と平明な英語で伝え合うという、国際共通語としての英語を意識して使えるようになる」が掲げられている。

以上のように、本学教養教育英語科目のカリキュラムは邦国の提言に基づき整備されているが、1年次科目の単位を未取得である「再履修者」が存在し続けており、それに対応することが必要不可欠な状況である。本稿では、本学教養教育英語科目における再履修者に関する問題点と再履修者数を削減する対応策を提示した後、対応策に基づいて策定された2017年度以降の再履修クラスカリキュラムを実施した結果を報告する。そして、2019年度再履修クラスカリキュラムを実施した結果に基づいて、今後の本学における再履修クラスの在り方について検討する。

再履修者に関する問題点

大学の教養英語教育における再履修者は、本学に限らず日本の大学では少なからず存在する（津田, 2007）。その再履修者に対する大学の対策としては、(a) 再履修用特別クラス編成（再履修者だけを集めて一斉に授業をする）、(b) 通常クラスに編入（下級生に混じって、同一レベルのクラスを繰り返して履修させる）、(c) 代替科目認定（コンピュータによる学習、英語資格試験の取得やスコアを単位化する）、の3タイプのクラス編成が挙げられる（津田, 2005a）。

本学教養教育科目は、2016年度に新カリキュラムが開始された。それ以前のカリキュラムにおいて、教養教育科目（21世紀科目）の英語は、必修の1年次科目として前期・後期にわたってListeningとSpeaking中心の「英語A」とReadingとWriting中心の「英語B」が開講され、センター試験（英語）の点数を基に上級・中級・初級の英語習熟度別クラス編成が行われていた。2015年度前期終了時点において、再履修者はのべ約300名おり、再履修者は1年次に履修したレベルの一番下の1年次クラスに配属されていた。新カリキュラムが開始された2016年度も、それまで同様の英語習熟度別クラス編成が行われ、再履修者は1年次クラスに配属された。したがって、本学における2016年度までの再履修者に対する対策は、上記の津田（2005a）によるタイプ（b）に相当する。

再履修者に対してこのような対策を続けた結果、再履修者を担当する教員から様々な問題が挙げられるようになった。それらの問題は、主に（a）教養教育担当と担当教員の負担、（b）授業の質の低下、そして、（c）再履修者の単位取得への意識低下、の3点に関する問題であった。

はじめに、問題（a）は、教養教育担当と担当教員の事務的な負担が非常に大きいという問題である。再履修者のクラス分けには、再履修者が各自で履修希望届を教養教育担当に提出し、それに基づいて教養教育担当がクラスを決定した後に、再履修者と担当教員にクラス配属の連絡がなされるという手続きが必要となるが、再履修者はその履修希望届の提出を怠ることが多く、大抵履修登録が終了する第5週目まで教養教育担当と担当教員は延々とその手続に関わらなければならなかった。また、すでにクラス分けされた再履修者でも、授業欠席5回前後になってから担当教員の研究室を急に訪れたり、メールでの履修相談を依頼したりしてくることも多々あった。その度に担当教員は個別に欠席分のフォロー・アップ（シラバスの説明、Moodleの設定、提出課題、テキストの追加発注、試験前であれば試験についての説明等）をしなければならないという、負担が非常に大きい状況であった。

次に、問題（b）は、再履修者が1年次クラスに馴染めないために、クラス全体の授業の質が下がるという問題である。担当教員からのフォロー・アップ後に授業に出席したとしても、その後も就職活動や研修・実習の為に授業を欠席する再履修者が多く、そのような再履修者は他の学生とともに活動することが難しくなるため、授業に遅れをとること必至であり、その結果1年次クラスに馴染めなくなる。ま

た、再履修者の中には、英語に対して苦手意識が強く、その心情が行動として現れ、クラスに悪影響を与える学生も少なくなかった。さらに、1年次生と再履修者は、お互いに遠慮している場面もよく見受けられた。例えば、グループ活動時にグループ内に英語が苦手だからと活動しない再履修者がいると、そのグループ内の1年次生までもが学習に対するやる気を失い、私語が目立ち、課題を成し遂げられなくなるグループもあった。

最後に、問題（c）は、21世紀教育科目受講者の単位取得への意識の問題である。21世紀科目は前期と後期に同じ科目名が開講されていたため、前期もしくは後期に単位を取ることができる選択肢があった。そのため、クラス分けされた先の開講時間や担当教員が自分の好みと合わない場合、受講時期を先伸ばしにすることが可能であり、単位取得への意識が低下しがちであった。

再履修者数を削減するための対応策

上記の問題点を解決し、再履修者数を削減するための対応策として、2016年度に英語ワーキンググループにて以下の4点が検討された。

外部試験

2016年度から成績評価に外部試験結果を20%組み込むことで、成績評価の平準化と厳密化を目指した。学習成果への客観的な評価の導入は、中央教育審議会大学分科会（2008）の『学士課程構築に向けて』でも「成績評価についても、きめ細かな指導を行った上で、客観化・多面化に向けた様々な創意工夫を凝らしつつ、厳格な評価を行うことが強く要請される」と述べられており、成績の客観化と平準化のために外部試験が多く大学の導入されている。この2016年度から実施することが決まっていた外部試験であるが、2016年度は上級・中級と初級では受験試験のレベルが異なっていたため、より高い平準化を目指して、2017年度より統一試験を実施することとなった（横内・立田, 2020）。2018年度には、入試制度の変更に対応するために、その統一試験と同じ外部試験を英語プレイスメントテストとして4月の入学時に実施することとなった。そうすることで、一つの外部試験の結果を指標として、入学時・前期末・後期末と継続的な学習成果や学力推移の検証が可能となり、本学教養教育英語科目の質保証の検証にも有効となった。

成績評価方法

2015年度までの成績評価方法は、各担当教員に委ねられていた。2016年度に成績評価の平準化と厳密化を目指して上記のように成績評価の一部に外部試験が導入されたため、2016年度には客観的評価（外部試験結果、20%）と教員による評価（80%）による総合的な成績評価が開始された。さらに、2017年度からは、成績評価の平準化を推進しつつ再履修者数を削減する対応策として、多面的に成績を評価するために、教員による評価（80%）に以下の3項目を設定し、担当教員の裁量によって各項目20~40%で評価することとなった。

1. Participation (Class activities)：授業内活動への評価である。例えば、グループ活動への参加や、授業内で行った課題への評価が当てはまる。
2. Examination/Presentation/Paper/Project：各クラスのレベル・各科目において設定された具体的達成目標の到達度を測定・評価する。例えば、中間・期末試験、またはそれらに相当するプレゼンテーション、レポート、プロジェクト等による目標到達度の測定・評価が当てはまる。
3. Assignments/Self-study：授業外活動や自律学習の取り組みを評価する。例えば、教員から指定された宿題や、授業外で行うe-Learning、イングリッシュ・라운ジの利用を評価に組み込む際に、こ

の項目を使用する。

学習環境の整備

上記に示した教員による評価3.に関連し、AssignmentsやSelf-studyに活用するために、本学大学附属図書館と連携して図書館に英語多読コーナやDVDコーナを設置した。そして、図書館主催の英語多読週間やPOPコンテストの活用を教養教育英語科目担当教員に周知した（立田, 2020a）。また、2017年度に教養教育英語科目パンフレットを作成して本学における英語学習環境を教職員と学生に周知し、2020年度には統一教材として学習ガイドブック（立田, 2020b）を作成した。

再履修クラスの設置

すでに存在する再履修者への対応策としては、再履修クラスを設置することを検討し、以下の内容のカリキュラム案が策定された。

1. 再履修クラスを各科目週1コマ設定し、再履修者は、開講時間が自分が受講する他の授業と重ならなければ再履修クラスに、重なる場合は1年次クラスに所属する。
2. 教材には、担当教員の負担を考慮して欠席分のフォロー・アップが最小限で済むように各90分授業内に完結する担当教員作成の教材もしくはe-Learning教材を使用する。
3. 再履修クラスの授業では基本的に英語によるコミュニケーションは重視しない。

これは、津田（2005a）によるタイプ(a)～(c)のハイブリッドに相当するカリキュラムである。

再履修クラスカリキュラム

2017年度

2016年度に策定された上記再履修クラスカリキュラムが、2017年度に実施された（表1）。本学教育推進機構教養教育開発実践センターの専任教員2名（うち1名が筆者）が前期と後期でそれぞれ1科目ずつ担当し、2017年度に受講予定の再履修者数が一番多かった中級レベルの3年次以上（旧カリキュラム受講者）を受講対象とした。1年次クラス同様に、前期開講科目であるListeningとReadingは前期に、後期開講科目であるSpeakingとWritingは後期に、それぞれ週1コマ開講された。教材には、すでに本学に導入されており学生が無料で自由に使用可能な英語e-Learning教材が使用された。このe-Learning教材は、TOEIC® Listening & Reading Test対策用に作成されたものであり、身近な話題から専門知識を要する社会問題まで、幅広い分野のトピックが取り扱われていた。Readingの課題には内容理解や語彙確認に関する問題、Listeningの課題には内容理解に関する問題の他にディクテーションやシャドーイング等の活動が含まれており、学生は、各自の英語習熟度に合った英語レベルと各自の興味に合ったトピックを選んで、学内・学外を問わずに好きな場所で好きな時間にそのe-Learning教材を学習することができた。

授業では、再履修者は、e-Learning教材の中から各自で2～3の学習レベル・トピックを選んで各自のペースで学習した。その際、Self-assessment・Memo・Commentsの3つのセクションから成り立つSelf-assessment Sheetと名付けたシートを活用した。まず、Self-assessmentでは学習ユニットの出来具合をExcellent/Good/Fair/Poor/Noneの5段階で自己評価し、次に、Memoには学習した単語やトピックについての要約、トピックに対する感想、さらにはそのトピックについて自分で調べたこと等を記入した。最後に、Commentsには自由に記述した。その回に興味を持った学習内容について書く再履修者もいたが、「今日はいい天気ですね」「前回休んでごめんなさい」等、Commentsを担当教員とのコミュニケー

ションの手段として用いた再履修者もいた。担当教員は、授業の最初に、全員の学習進捗状況を確認して再履修者を励まし、また、前回良く書けていたSelf-assessment Sheetをクラス全体にモデルとして提示して学習内容や学習方法を共有する時間を設定した。授業中は、机間巡視して再履修者からの質問に答え、授業の最後にSelf-assessment Sheetを回収する際には、「よくがんばりましたね」「次回は上のレベルの学習をしてみたら良いと思うよ」等の声かけをする等、再履修者を励まして継続的な英語学習へのモチベーションを高めさせるように心がけた。

この2017年度再履修クラスカリキュラムでは、履修登録率と単位取得率（履修登録人数に対する単位取得人数の割合）、そして、e-Learning教材の内容について課題が残った。履修登録率に関しては、各科目週1コマしか開講しなかったために開講時間が合わない再履修者は1年次クラスに配属されたとは言え、履修登録率が、再履修クラスと1年次クラスを合わせても、前期開講科目Listening 53.68%・Reading 66.67%、後期開講科目Speaking 37.90%・Writing 34.67%であり、後期開講科目は特に低かった。その理由の一つとしては、上記の再履修者に関する問題(c)再履修者の単位取得への意識低下が、季節的に前期よりも後期の方がより一層強いのではないかということが考えられる。また、単位取得率に関しては、Speaking以外の3科目において、再履修クラスに所属した場合の方が、1年次クラスに配属される場合よりも単位取得率は高いものの、再履修クラスでさえも単位取得率は100%にならずに、さらに再履修となる再履修者もでた。1年次クラスに配属される場合の方が単位取得率が低い理由としては、再履修者に関する問題(b)で言及した授業の質の低下の一因である、再履修者が1年次クラスに馴染めないためである可能性が高い。e-Learning教材の内容に関しては、それがTOEIC Listening & Reading Test対策用に作成されたものであり、ListeningとReadingの課題に限定されていた教材であったため、SpeakingとWritingに特化したe-Learning教材を検討する必要がある。

表1 2017年度再履修クラスカリキュラムと受講者情報

	Listening		Reading		Speaking		Writing	
開講レベル	中級		中級		中級		中級	
コマ数/週	1		1		1		1	
使用教材 (学習内容)	e-Learning (Listening/Reading)		e-Learning (Listening/Reading)		e-Learning (Listening/Reading)		e-Learning (Listening/Reading)	
受講対象人数 ^a (3年次以上)	95		75		95		75	
所属クラス	再履修	1年次	再履修	1年次	再履修	1年次	再履修	1年次
履修登録人数 (履修登録率)	38 40.00%	13 13.68%	35 46.67%	15 20.00%	22 23.16%	14 14.74%	20 26.67%	6 8.00%
単位取得人数 (単位取得率)	29 76.32%	5 38.46%	29 82.86%	8 53.33%	11 50.00%	9 64.29%	17 85.00%	2 33.33%

Note. ^a 再履修対象人数のうち、3年次以上の再履修クラス受講対象者の人数を指す。

2018年度

2017年度に残った課題を十分に検討する時間が必要であったため、2018年度は再履修クラスを設置せず、再履修者は1年次クラスに配属された（表2）。2018年度も履修登録率と単位取得率が低く、再度再履修になる再履修者がでた。

表2 2018年度再履修者情報（再履修クラスなし）

	Listening	Reading	Speaking	Writing
再履修対象人数 (2年次以上)	90	105	127	125
所属クラス	1年次	1年次	1年次	1年次
履修登録人数	71	82	76	81
(履修登録率)	78.89%	78.10%	59.84%	64.80%
単位取得人数	45	60	53	56
(単位取得率)	63.38%	73.17%	69.74%	69.14%

2019年度

2018年度に策定された再履修クラスカリキュラムが、2019年度に実施された（表3）。2017年度再履修クラスカリキュラムとの違いは、開講科目を3レベル（上級・中級・初級）合同クラスとして1クラスにまとめ、また、前期開講科目である Listening と Reading を後期に、そして、後期開講科目である Speaking と Writing を前期に開講した点である。そうすることで2017年度に再履修者の履修登録率がより低かった後期開講科目の履修登録率と単位取得率を高め、さらに、前期にそれらの科目が専門科目と重なって受講できなかった場合には後期に1年次クラスに所属できるチャンスを作った。担当教員は2017年度と同じ教員2名であり、受講対象は2017年度同様に3年次以上であったが、2019年度の3年次以上には旧カリキュラムと新カリキュラムの両方の受講者が含まれた。教材には、Listening と Reading は2017年度と同じ本学に導入されていたe-Learning教材のそれぞれの科目に特化した教材が使用されたが、Writing はそれとは別の Writing に特化したe-Learning教材を受講者が各自で購入することとなった。Speaking は、適当な e-Learning 教材が入手できなかったため、担当教員作成の教材が使用された。新たに Writing に導入された e-Learning 教材は、Writing における Plan の立て方、Draft の作成方法、校正の仕方を学習した後、学習した内容を実際の Writing 課題に応用するという流れが組まれており、英文構成の基礎から洗練された表現まで幅広く学習することができるため、3レベル合同クラスでも、再履修者は各自の英語習熟度に合った英語レベルの学習が可能であった。また、この e-Learning 教材も Listening と Reading の e-Learning 教材同様に、再履修者は、各自の興味に合ったトピックを選ぶことができ、授業時間以外でも学内・学外を問わずに各自で学習を進めることができた。担当教員は、2017年度同様に、授業開始時に学習進捗状況を確認して再履修者を励まし、Self-assessment Sheet についての情報をクラス全体で共有して、また、机間巡視や Self-assessment Sheet へのコメントを通して再履修者と関わり合うことによって、再履修者の継続的な英語学習へのモチベーションの向上を目指した。

2017年度に残された課題を検討した上で実施された2019年度再履修クラスカリキュラムであったが、それでも履修登録率と単位取得率の低さが再び課題として残った。開講科目を3レベルとしたにも関わらず、再履修クラスへの履修登録率が、前期開講 Speaking 11.27%・Writing 18.33%、後期開講 Listening 12.50%・Reading 18.00% であり、2017年度のそれらの科目への履修登録率よりも低かった。これは、再履修クラスの開講時期が前期と後期で逆になったことについての周知不足であると考えられる。同じ科目の1年次クラスへの履修登録率は2017年度より高かったため、2019年度が2017年度よりも再履修者の単位取得への意識が低かったためとは考えにくい。また、単位取得率に関しては、4科目全てにおいて、再履修クラスに所属した場合の方が、1年次クラスに配属される場合よりも単位取得率は高いとは言え、さらに再履修となる再履修者が存在し続けている状態であった。この2019年度終了時には、単位未取得者は Listening 114名・Reading 131名・Speaking 137名・Writing 170名に上った。

表3 2019年度再履修クラスカリキュラムと受講者情報

	Listening		Reading		Speaking		Writing	
開講レベル	上級・中級・初級 (合同)		上級・中級・初級 (合同)		上級・中級・初級 (合同)		上級・中級・初級 (合同)	
コマ数/週	1		1		1		1	
使用教材 (学習内容)	e-Learning (Listening)		e-Learning (Reading)		担当教員作成 (Speaking)		e-Learning (Writing)	
受講対象人数 ^a (3年次以上)	56		50		71		60	
所属クラス	再履修 (後期)	1年次	再履修 (後期)	1年次	再履修 (前期)	1年次	再履修 (前期)	1年次
履修登録人数 (履修登録率)	7 12.50%	13 23.21%	9 18.00%	16 32.00%	8 11.27%	35 49.30%	11 18.33%	31 51.67%
単位取得人数 (単位取得率)	5 71.43%	5 38.46%	8 88.89%	4 25.00%	5 62.50%	21 60.00%	7 63.64%	17 54.84%

Note. ^a 再履修対象人数のうち、3年次以上の再履修クラス受講対象者の人数を指す。

今後の再履修クラスカリキュラム

2019年度終了時点において単位未取得者が多数存在することを考えると、2016年度に英語ワーキンググループが検討した4つ対応策が十分に機能しているとは言いがたい。まずは1年次クラスにて学生が単位を取得すること、そして、そのために教員が学生をサポートすることが望ましいが、再履修者が存在する限り、再履修者への対応を適切に実施せねば再履修者数は増加するばかりである。

2019年度に課題として残った履修登録率と単位取得率の低さを解決するためには、1科目あたりの再履修クラスのコマ数を増やして2コマ以上にし、そして、受講対象の枠を拡大し、3年次以上と限定せずに、2年次以上、つまり再履修者全員を再履修クラス所属とすることで、単位取得率が低い1年次クラスへの配属をなくす必要がある。再履修クラスに所属した場合の方が1年次クラスに配属される場合よりも単位取得率は高いことから、教材には、引き続き各自の英語習熟度に合った英語レベルと各自の興味に合ったトピックを選ぶことができるe-Learning教材を使用することが望ましいと考えられる。

このe-Learning教材を使用した授業形式に関しては、本学の教育活動は基本的に対面授業で行われていることを考慮すると、本学における再履修カリキュラムは、2017年度と2019年度のような「教員による対面授業」と「e-Learning教材を活用した自律学習」を混合（ブレンド）した「ブレンディッド・ラーニング」を取り入れたカリキュラムが有効である可能性がある。上記のように、2017年度と2019年度は、対面授業の中で、再履修者は、各自の英語習熟度に合った英語レベルと各自の興味に合ったトピックをe-Learning教材の中から選んで自分のペースで学習した。この授業形式は、教員が学習内容を直接的に指導する一般的な講義形式や、学生がクラスで一斉に同じ課題に取り組む演習形式とは異なる、ブレンディッド・ラーニングと呼ばれる形式の一種である。基本的には再履修者のペースに合わせた自律学習であるが、担当教員は、授業の最初には全員の学習進捗状況を確認して再履修者を励まし、良く書いていたSelf-assessment Sheetをクラス全体に提示して学習内容や学習方法を共有する時間を設定した。また、机間巡視で再履修者からの質問に答え、Self-assessment Sheetへのコメントを通して、再履修者の継続的な英語学習へのモチベーションの向上を目指した。このように、2017年度と2019年度の再履修クラスでは、担当教員は再履修者の学習内容とは最小限の関わりしかなかった。ブレンディッド・ラーニングを取り入れた再履修クラスカリキュラムにおいて、その関わり方と関わりの程度・頻度

を再履修者の心理面と教育効果の観点から検討し、カリキュラムの有効性を検証することが、本学における再履修クラスカリキュラムの今後の課題である。

まとめ

本稿では、2017年度以降の本学教養教育英語科目における再履修クラスカリキュラムを実施した結果を報告した。2019年度再履修クラスカリキュラムを実施した結果から、今後は、再履修クラスのコマ数を増やし、受講対象者の枠も拡大する必要があることが明らかになった。本学における再履修カリキュラムは、ブレンディッド・ラーニングを取り入れたカリキュラムが有効である可能性があるが、実際にそのカリキュラムを実施してその有効性を検証することが今後の課題である。

注

本稿は、2020年7月24日に開催されたリアリーイングリッシュ第1回オンラインセミナーにて「再履修科目におけるオンライン教材の活用 弘前大学」にて発表したデータを含む。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費19K00755の助成を受けたものである。

再履修クラスカリキュラム作成にご協力いただいた英語ワーキンググループ（現英語部門）の先生方、再履修者に関するデータを提供してくださった教養教育担当、そして、本稿作成にご助言くださった中村裕昭先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 中央教育審議会. (2008). 学士課程構築に向けて. 中央教育審議会大学分科会
- 中央教育審議会. (2012). 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ. 中央教育審議会大学分科会
- 日本学術会議. (2010). 21世紀の教養と教養教育. 日本学術会議
- 立田夏子. (2020a). 教養教育英語科目における Extensive Reading の取り組み—大学附属図書館との連携—. 第69回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究集録, 46-49.
- 立田夏子. (2020b). 弘前大学教養教育英語科目学習ガイドブック. 横内裕一郎 (編). 金星堂
- 津田晶子. (2005a). 大学英語プログラム分析. 国際科時代の大学英語教育—現状と足枷と新たな可能性—, 1-86.
- 津田晶子. (2007). 大学必修英語の再履修学生に関する調査と考察. リメディアル教育, 2(1), 1-6.
- 横内裕一郎, & 立田夏子. (2020). 教養教育英語科目における VELC Test の導入と結果分析. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル, 4, 39-47.